

鬢五郎の造型

— 三馬『浮世床』を継承する鯉丈の意識に即して —

正 木 未 来

—

滝亭鯉丈は、式亭三馬の『浮世床』初編・二編（以下、「初編」「二編」と略称する）を引き継ぐ形で『浮世床』三編（以下、「三編」と略称する）を著した。刊行は文政六年。三馬の死去は文政五年閏正月六日のことで、三馬の死後一年で出版されたことになる。二世南仙笑楚満人（為永春水）の序にはまだ三馬が存命中である旨を記すので、三編執筆の要請が鯉丈にもたらされた時には三馬は生きており、執筆中か刊行準備中に訃報が届いたものと思われる。いずれにせよ鯉丈は三馬の死が早晚訪れることを覚悟し、あるいは三馬を悼む気持ちを込めて筆を取ったはずである。

このような成立事情を持つ三編であるが、これまでの『浮世床』に関する研究史を繙いてみても、三編の内容について考察したものは少ない。もともと『浮世床』研究の多くが近世語資料としての分

析を主とし、作品の読みを事とする研究は少なかったが、三馬の作ではない三編は、初編・二編と違って注釈が施されることさえなく、ほぼ放置に近い扱いを受けてきた。鯉丈研究においても、三編の執筆は必ずしも主要な伝記事項とは見なされていない^①。そのような研究状況の中、鈴木圭一氏は、三編が為永春水作『軒並娘八丈』と内容上交錯している点を考察し、三編の髪結の親方鬢五郎が『軒並娘八丈』の才三郎と同一視されるように書かれていると指摘した。鈴木氏によれば、元は武士であり、詮議のために髪結いに身をやつしているという『軒並娘八丈』の才三郎は、お駒才三郎を描いた「恋娘昔八丈」の世界を題材とした合巻七作品と比較しても、髪結の設定が強調されている、という。この鈴木氏の論は、三編の内容に関して初めて詳細な検討を加えたという点で貴重である。

もっとも、鈴木氏の議論は春水の編集の影響が多分に三編に認められる証拠としての意味づけに向かい、三編自体を読み解く方向に

は進んでいない。私は今回、鈴木氏とは別の観点、すなわち作中人物の造型に重きを置く立場から三編を読んでみたい。これにより先行研究ではその内容をほとんど吟味されてこなかった三編の新しい読みの可能性を導き出すことができればと思う。

二

三編の序文に次のような一節がある。

文栄堂に頼まれて、柳髪新話の三編目を本丁庵へ言入れしは、三年已前のことなりしが、近来先生多病にして、風呂の加減も床髪も暫筆を留置のみ、何なら今年は下剃で束ねて貰て置給へと、教の仮に筆採は、滝亭鯉丈が床預り³

また、三編下巻の本文末には、作者鯉丈の口上と取れる次のような記述が見える。

書肆のもとめにいなみがたく、こはく出せし三編目、浮世の床の人情も、初編二編は親方が^{三馬大人}をさす。好にまかする作意の妙案、此三編の拙きは、下ずりの留吉になでつけさせたと見給へかし。

春水も鯉丈も、鯉丈を留吉になぞらえる表現をしている。三馬を親方鬢五郎に、鯉丈自身を留吉にそれぞれ擬することで、作品の拙さを弁解しているのである。鯉丈の力量不足の断りのために導入された言葉としてまずは読まれるべきなのはいうまでもないが、果た

してそれだけだろうか。三編の丁を一枚ずつめくる読者の立場に即して考えれば、作品の最初と最後に、いわば念を押すように「留吉」鯉丈「鬢五郎」三馬の図式が提示されることの意味は決して小さくはないように思われる。ひよっとしてこの見立ては三編全体に枠組として適用されるべきことを示しているのではないだろうか。二つの文章を読んで、以上のような疑問を禁じえないのである。

もっとも、三編全体に描かれる鬢五郎と留吉の言動すべてに三馬と鯉丈の実像が投影されているとは考えにくい。戯作の登場人物とは作者の自己像を託するような性格のものではないし、特に脇役留吉にそこまでの思い入れを鯉丈が抱くとは思えない。しかし、三編冒頭から読み進めていく読者の念頭には「留吉」鯉丈「鬢五郎」三馬の図式が浮かんできてもおかしくないような人物設定がなされているように思われる。

そもそも、三馬が著した初編・二編において、留吉はどのように描かれたのか。初編上冒頭では、鬢五郎が起床するまでの間、客の隠居と軽口をたたくものの、鬢五郎が登場すると途端に出番は乏しくなり、孔叢と鬢五郎の会話に「左官だの壁だのとつけるも尤だ^ネ。あいつが壁へ穴を明ちや、左官さわざだ」と口を挟んでは、鬢五郎に「べらぼうめ、だまつ居ろ」とたしなめられ、「アイトへこんで門口をさうぢしてゐる」ということになる⁴。また、権助から駄菓子⁵の銭を催促された「十二三のでつち」に暴露されてのやりとり

で、「この調市は、覚えてみやアがれ。無もしねへことをぬかして」と反発するのを鬢五郎から「ヤイ、留。からかふなイ。だまつて仕事をしろ^エ」と咎められる（初編下、二九二―二九三頁）のも同様で、要するに主人の鬢五郎の前では小さくなるしかない、しががない存在である。

ところが三編に入ると、上巻二十四丁のうち十六丁ウラまで、つまり上巻の三分の二あたりまで、「今日は主の鬢五郎は歳始残りのため廻りに出、剃出しの留吉がい、わけをしながら間に合せに結て居る」という鬢五郎不在の状況が続くなか、留吉は客とのやり取りを十分に楽しみつつ会話を交わしている。その存在感たるや、初編・二編の比ではない。しかし留吉は「い、わけをしながら間に合せに」仕事をする。主人の代わりを勤めることである程度心の張りを持ちながらも、どこか不安の色は隠せない。そんな留吉の姿が、三馬の代わりに筆を取っておずおずと三編をしたためる鯉丈の姿と重なるのはむしろ自然ではなからうか。

また、上巻十六丁ウラで鬢五郎が帰ってきた時の留吉の反応も、「すつとはいるを見れば主の鬢五郎、留吉はびつくり、にが笑をして居る」というものだったし、隠居に「やれうれしや、親方がけへッちやア、モッコつちのものだ。サア留、てめへにはモッコ用はねへぞ」といわれては、「ヘントいつたばかり、鬢五郎が帰りしゆへ、今までのようにしやべらず、へこんでいる」しかなかった。実際にはあ

りえないことだが、もし三馬が病床から復帰して続稿執筆が可能となったら、鯉丈が読者から同じようにいわれたとしても仕方がなかったわけで、鯉丈も「今までのようにしやべらず、へこんでいる」、つまり三編より後を書き継ぐことはないはずである。力不足を自覚しながら三馬の代表作の一つを継承した鯉丈の自信のなさ謙遜の意を読者に実感してもらうには、留吉の不安に託するのが最も効果的であると考えたのではないだろうか。

三

留吉が脇役に過ぎないのに対して、主人の鬢五郎は狂言回しとして重要な役回りである。もし鬢五郎に三馬の面影をしのぶことが出来るように三編が書かれているとすれば、その鬢五郎は三馬が初編・二編で書き継いできた人物像と齟齬をきたさないように造型されなければならぬ。そのような目で初編・二編を読み返すと、あることに気付かされる。それは、入れ替わり立ち代わり顔を出す客同士の無駄話に所々差し挟まれる鬢五郎の発言に、彼の人柄が表に出る場合が少なくないということである。以下、初編・二編の鬢五郎がどのような人物として描かれているかを確認してみよう。

まず印象的なのが、長居した隠居が退場した直後の鬢五郎たちの会話である。

熊「気の能隠居だのう　　びん「けつかうだ　　熊「息子が仕合せだ

ぜ びん「あの息子もよく持で利口者だから身上は大丈夫だ

熊「親子ながら仕合といふのだの でん「どうもさく、て能

でん「あれでも若い時には金を遣たらうか びん「ナアニそりやア

ねへのさ 熊「只口ばかりサ びん「口には物がいらねへ。夫だ

から利口だはな でん「通人だの通り者だのといふ奴は全体野

暮だぜ。其証拠には皆身上茶くむちやくだ びん「野暮だく

といふ人は身上をよくして人にも笑はれず、間には貧乏な奴を

救てやつたり何角する。おらアその方が通り者だらうと思ふ

(初編上、一二六五―一二六六頁)

口の減らない客たちが珍しくしんみりと隠居の噂をし、話題はそのまま遊興論に移っていくのだが、最後の鬢五郎の言葉は常識的ながら真情に溢れる。ほかにも遊興観が鬢五郎の口から率直に表出された事例はいくつかある。

びん「むかしの誰とかいふ女郎が、通人とは廊へ這入らぬ人を

通人といふ、女郎買をして金をつかふ者は、おそかれ速かれ身

体を減すから、野暮だと云たさうだが、悟つて見ればそんなも

のかい 短「違ねへ 長「角屋敷竟には野暮の手へ渡り、ト川柳

点にあるが、うそはねへ びん「通だの通り者だのといはれて

身体を潰すよりかも、野暮と云れて金をためた方が利方だの

長「それをしりつ、迷ふやつさ びん「あれもちつとは迷つて見

るが、のさ。若い内にちつと修行して見て、早く足を洗ふが

い。上手になれば成ほど金が入る (中略) びん「なんでも商

売に精出して見ねへ。親もにこくすれば、か、アも焼餅はや

かずか、物前にも苦勞がうすくて、寿命が延るやうだ (中略)

びん「若くても、おめへたちのやうに早く心づくと大丈夫だが、

兎角若者はさう行ねへものさ (初編下、二九一頁)

びん「中右衛門さんも、あの息子では大きに苦勞するの 短「さ

うよ 長「こまつた子だぜ びん「ひとり子と云ものは、兎角あ

まやかすから役に立ねへ (中略) びん「人も三十越してどうら

くになつたのはむづかしいよ。其筈だ。見るほどの事、きくほ

どの事が皆珍らしいから、爰でたまらねへはな (初編中、二八

九―二九〇頁)

このように遊興に関する鬢五郎の言葉は、いずれも冗談とは受け取れないほどに真面目な教訓が基調をなしているのである。

続いて鬢五郎の仕事に対する姿勢を窺わせる事例を見よう。先

の初編下の引用中にも「なんでも商売に精出して見ねへ。親もに

こくすれば、か、アも焼餅はやかずか、物前にも苦勞がうすく

て、寿命が延るやうだ」という発言があつて、鬢五郎の真摯な態度

が示されたが、これは初編・二編を通じて変わることはない。どう

しようもない「でつち」の暴言に辟易した鬢五郎が、主人と奉公人

の関係から居候論へと話を進める一節、

びん「奉公人も主人は撰む事だが、主人も奉公人をは撰まねへ

と身上の爲にならぬの短「人の身体の能くなるのは、奉公人さへ能ければ速だ」びん「何事も運次第よ。智恵もねへ人が、金を持って大勢の人に崇め尊まれてゐる（中略）一生涯うろくまごつきあるいて方々」に尻が居らず、あすこも爰も居候で廻りまはつて、半年か小半年ある内には愛相づかしで又他へ行、又一年も過れば珍しくなつて這入込みの直に居びたれて、又居候（初編下、二九四頁）

などは、主人と奉公人との関係の重要性や、生業を持ってない居候の身の不安定さに寄せる鬢五郎の思いを伝えて余りあるし、錢右衛門の居候飛助を批判する一同の会話中に差し挟まれる「すべて何の業をするとも、田舎へ出て錢設をするやつは、それだけの力だの。立派にして通るものは、旅歩はせず、江戸に座居て事をするはさ。そこが江戸のありがたい所だ」（初編下、二九八頁）も、江戸で立派に商売を展開する鬢五郎ならではの重みある述懐として聞くことができる。さらに、鬢五郎自ら髪結いの苦勞を語る場面では、

びん「其上に髪結といふものは場所をしゃやうが床を預らうが、人の機嫌氣づまを取らねへきやアなりやせん。是でも大勢の客の内にはむづかしい人があるはな。十人が十種をそれ々にあしらつて、其人の好きな事に連て口を合せようといふものス。女郎と同じ調子よ。此商売は別して内股膏葉がいい、のさ（二編下、三四二頁）

のように、客商売独特の苦澁をかみしめつつ述べられて、印象深いものがある。そのような苦勞の結果、鬢五郎は客の蛸助から、

それにつけても此鬢公は如才ねへよ。場所は五六町預り、床は三ヶ所預つて皆弟子を出して置くし、云分はねへ。其上に、此床は自身に手をおろして欲ばるか。それだから金がウシくどうならア（二編下、三四三頁）

と評されるほどの成功を収めたわけで、これら一連の鬢五郎の発言は、江戸の町で商売をする者の心構えとして有益な教訓となつているのである。

これに加えて、初編中で長々と展開される鬢五郎の上方者と江戸者との比較論では、徹底的に上方者の気の長さや嘲笑しながらも、上方者作兵衛に「爰な鬢公めは、私の顔さへ見りや争ひでござります。ハ、おまへさんがたへお負を申すぢやないが、上で生れた私ぢやが、一体は御当地のお人様は義強うてトット人気が勇しいナ。それゆゑ私どもも大好でござります。こりや最う、ほんまの事でござります」（二八四頁）と褒め言葉を貰い、二編上では焼餅を焼くと鬢五郎の逆鱗に触れるとばやく女房も、松に「うさアねへ。その代に情があるめへ」（三三二頁）と突つ込まれると「そこはどうだか」（同）と愛情故の愠気をほのめかす。

以上を総合して、初編・二編の鬢五郎は、色事において十分女房に焼餅を焼かれる位の経験を有しながらも常識人としての抑制を保ち、

髪結いの主人としてはしつかりとした見識と業績を保つ。喧嘩早いところはあつても相手に憎まれることはない。そんな鬢五郎がふともらす、趣向や典拠とは無縁の率直な発言は、教訓としての内容を豊かに持つだけに、客達の無駄話の中で少ないながらも異彩を放ち、読者の印象に残る。初編・二編とも次から次に導入される滑稽話のおかしさはかりに注目が集まり、所々に挿入される鬢五郎の発言の真意を窺う試みはこれまで成されなかつたが、鬢五郎に託しておのれの本音を語らせる意図が三馬にあつたのではないかと思わせられるほどに、鬢五郎の言葉には重みがあつた。そこに当時の読者が気付かないはずはないのではないか。

四

ここで、資料により確認できる三馬の人柄を一瞥しておく必要があろう。曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』に、

学問はなけれども才子なれば、自序などを綴るによく故事をと
りまはして漢学者のごとく思はれたり。只その文に憎みあり。
性酒を嗜て人と鬪諍せしことしばしく聞えたり。絶て文人の
氣質に似ず。又商賣のごとくにもあらず。世の俠客に似たるこ
と多かりしに、既に初老に及びてより酔狂を慎みて渡世を旨と
せしといふ。⁽³⁾

とあるのは周知のこと、また『浮世風呂』四編の金竜山人（振鷺

亭）跋に、

式亭主人は鳩車竹馬の友なり。性素より拙弁、生平の茶譚殊に
鈍し。故に人呼で面白くなき人とし、且話のなき人とす。買客
にして驢人、野暮にして在行。居は市中にありて自ら隠れ、躬
は俗間にありて自ら雅なり。言語を通めかさず、妄に陳奮翰を
吐す。形容を睥がらず、仮にも利屈臭を論ぜず。ごぜへすの結
交、敬して聞け、来玉への招待、辞して到らず。陰物ならず陽
気ならず、かた／＼よらずかたよらず、凡中位の好男なり。⁽⁶⁾

とあるのも、三馬の人柄を十分に伝えることで名高い。以上の資料
に三馬の日記『式亭雜記』⁽⁷⁾に載せる勝川春亭との絶交と和睦のい
きさつを加えれば、三馬の人となりを物語る主要な情報は出揃う。
これらを踏まえて棚橋氏は、「作品とは対照的にむしろ訥弁で飾ら
ず寡黙ながら筋を通す性格であつたことが窺え（中略）この一種親
分肌に似た三馬の性格を慕つて門人希望や近付きを求める人の多か
つたことが裏づけられているといえよう。」⁽⁸⁾とされた。

ここまで検討を加えて改めて初編・二編の鬢五郎の描かれ方を思
い返すと、実際の三馬の人柄と鬢五郎の役柄には共通する部分が多
く見られることに気付く。三馬が描いた鬢五郎像は、図らずも三馬
自身を彷彿とさせるものだつた。読者としての鯉丈はおそらくこの
相似を読み取り、それを念頭に置いた上で、今度は作者として自身
の三編を構想したと思われる。

五

鬢五郎の不在に伴う留吉の代行は、三馬に代わって三編の筆を取った鯉丈の立場を象徴すると推測した。となれば、鬢五郎が外出中に遭遇した事件も、三馬との関連で意味づけることが可能なのではないか。

帰宅した鬢五郎は、外出先での出来事を説明する。両国橋を渡る途中で、身投げをしようとする女を助けようと頑張ったが、実は身投げではなかったという騒動を起こしてしまい、気色が悪くなっても足さずに帰ってきたというのである。鬢五郎が橋で助けようとした女は、身投げではなく実は歯痛のために泣いており、袂に入っていたのも石ではなく「大きな梨子が二ツ」だった、ということになっている。まずこの設定の意味するところは何なのだろうか。私見では鯉丈が三馬を意識していたからこそ歯痛にしたと推測する。三馬が生まれたのは浅草田原町であった。この地は別名で源水横丁と呼ばれており、代々この地に松井源水が居を構えていたこと由来する。松井源水は、曲独楽の芸をして人を集め、反魂丹や歯磨き粉、歯の薬を売っていた有名な曲芸師である。⁽⁹⁾三馬と歯痛には源水横丁という接点がある。鯉丈が身投げ女の涙の理由を歯痛にしたのには、三馬との関連で必然性があったのである。

次に、この身投げ騒ぎがなぜ両国橋の上で展開されたのかを考え

る必要がある。鈴木氏の指摘⁽¹⁰⁾にもあるように、お駒才三郎の世界の中で橋上での騒動が一つの見せ場となっているのは確かである。鈴木氏は、「滑稽を主眼とする作品の主人公に、男達の印象がある」と、これが『浮世床』三編の大きな特徴であり、「親方鬢五郎が、女を身投げと間違ひ抱き止める場面は、その好例といえる。」とした。鬢五郎と才三郎を重ねるように設定されているのは確かなので、鈴木氏の指摘は首肯できる。ただし、鬢五郎の色好みと実直さを両立させた人柄は既に初編・二編でも示されており、それを十分に踏まえて三編の鬢五郎が造型されたと考えられるので、三編に限って鬢五郎が持ち前の俠気を發揮したわけではないと見る。つまり、才三郎と同一視されることだけを狙って鬢五郎に女を抱き止めさせたわけではないと考えたいのである。またこの趣向は、同じ文政六年に出た『八笑人』三編にも取り入れられており、鯉丈は同じ趣向を二作品に利用している。両国橋で身投げと誤解するという設定そのものはある程度普遍性を持っていた。重点はむしろ、「マツ今朝ずいと出がけに本所へゆかうと思つて両国橋へか、」った鬢五郎が、身投げ誤解の一件を経て、「あんまり馬鹿げて気しよくがわりいから、用もたさずに帰つて」来たことのほうにあるのではないか。鬢五郎が三馬を投影して描かれていることに注目して考えていきたい。

鬢五郎が出掛けようとしていた本所には回向院がある。回向院には、明暦の大火による焼死者十万八千体が葬られている。また隅田

川は橋にしても渡し舟にしても多くの命を飲み込んでいた。また、小野寺郷氏¹¹によれば、三途の川がこの世とあの世の境界線をなしているという観念は九世紀前半から明治時代まで存続し、三途の川に橋があるという観念は九世紀から十六世紀まで少数だが文献に見ることができ、船で渡るといふ観念もその後生まれ続けている、という。それを踏まえて以下のように推測する。すなわち、鯉丈が両国橋の騒動を挿入したのは、両国橋の架かる隅田川から「三途の川」という概念を連想させるためではないか。そして鬢五郎が「用もたさず」に帰って来やした」というように、彼を両国橋から帰還させることで、三途の川から三馬が帰ってくるということ、つまり病没した三馬のよみがえりを祈る思いを込めたのではないだろうか。

三編を出版した時点で、三馬の死後一年が過ぎている。現実にはよみがえりはありません、鯉丈が代理を務めるほかはなかった。しかし、本当は三馬が執筆すべきものだったと鯉丈は思っただろうし、多くの読者も三馬の筆致を偲んだに違いない。鯉丈はそんな読者に対し、せめて作中では戯作者三馬があの世から戻ってくるという読みを可能にしたかったのではないだろうか。異例ともいえるべき鬢五郎の不在が三馬の病没による空白を意味するのであれば、鬢五郎が本所で用事を済ませずに「どふりでむなさわぎがして、途中からけへッて来やした」といいながら帰還するのにも何らかの意味があると考えて、以上のような推測を述べてみた。

六

鯉丈は三馬の『浮世床』を受け継ぐにあたり、大きな不安や、読者の期待に応えなければならぬという重圧を感じていただろう。それら乗り越える原動力となったのはやはり、序で語られているように、三馬本人から執筆を依頼されたということが大きいのではないだろうか。三馬直々に後継ぎとして指名されたことは、鯉丈にとって大きな自信となっただろう。そんな三馬への感謝の思いが、三編の鬢五郎への投影という形で現れたのである。ただし、初編上の冒頭に登場し、亡妻への思いやりを示しつつ退場して、鬢五郎や客にも慕われた隠居も、三編では大きな存在感を持っている。この隠居の造型にも三馬を継承する鯉丈の意図が込められているように思われるが、これに関してはまた別の機会に検討したい。

注

- (一) 近年の伝記研究としては、棚橋正博氏「瀧亭鯉丈小考―『明烏後正夢』成立の前提として―」（堀切実氏編『近世文学研究の新展開―俳諧と小説へへりかん社、二〇〇四年一月）所収がある。なお、鯉丈と密接な関係のある為永春水や三馬についての近年の研究、すなわち山本誠氏「為永春水年譜稿その二」（『東洋文学大学院紀要』第三〇集、一九九四年一月）、同「為永春水年譜稿その二」（『文学論叢』第六八号、一九九四年一月）、棚橋氏「為永春水雑感―文化・文政期の春水―」（『国文学研究』第一一〇集、一九九三年六月）、同『式亭三馬 江戸の戯作者』（べりかん社、一九九四年二月）なども、鯉

丈に触れる所が多い。

- (2) 鈴木圭一氏「瀧亭鯉文の『浮世床』(内田保廣・小西淑子両氏編『近世文学の研究と資料―虚構の空間―』三弥井書店、一九八八年二月)所収。なお、同氏「瀧亭鯉文―滑稽本と人情本―」(『国文学解釈と鑑賞』五九巻八号、一九九四年八月)でも言及がある。

- (3) 以下、三編の引用は蓬左文庫蔵三冊本(請求記号 尾一三二一九)の国文学研究資料館紙焼写真による。ただし漢字は通行の字体に改め、句読点を打ち直し、振り仮名を省略するなどの処置を採った。なお序文全文は、注1所掲の棚橋氏「為水春水雑感―文化・文政期の春水―」や『式亭三馬 江戸の戯作者』注2所掲の鈴木氏「瀧亭鯉文の『浮世床』」に引用されて検討が加えられている。

- (4) 『新編日本古典文学全集 洒落本 滑稽本 人情本』(小学館、二〇〇〇年四月)所収『浮世床』(神保五彌氏校注) 初編上、二五六頁。以下、初編・二編の引用は同書により、編と巻、同書の頁数を添えることとする。また、振り仮名は省略する。

- (5) 木村三四吾氏編『近世物之本江戸作者部類』(八木書店、一九八八年五月) 四九頁の影印による。なお、引用にあたり句読点と濁点を補った。

- (6) 神保氏校注『新日本古典文学大系 浮世風呂 戯場桂言幕の外 大千世界茶屋探』(岩波書店、一九八九年六月) 二九三頁。ただし振り仮名は省略した。

- (7) 『続燕石十種』第一巻(中央公論社、一九八〇年五月) 所収。

- (8) 注(1) 所掲の棚橋氏『式亭三馬 江戸の戯作者』 八八頁。

- (9) 朝倉無声『見世物研究』(思文閣出版、一九七七年一月) 参照。

- (10) 注(2) 所掲『瀧亭鯉文の『浮世床』』。

- (11) 小野寺郷氏「日本に於ける三途の川の変遷」(『南山大学アカデミア 人文・社会科学編』六〇巻、一九九四年九月) 参照。